

分子組織化学の今昔

國武 豊喜 （北九州産業学術推進機構）

私の研究生生活は1960年頃に新規高分子の合成や酵素モデルの開発を主テーマとして始まった。しかし、酵素の活性中心を合成高分子で再現しようとする酵素モデル研究は、人工の高分子鎖を精密に組織化する手段を見いだせないため、大きな展開が困難であった。それに続く1970年代からの合成二分子膜の研究では、分子組織を触媒反応に利用するところからスタートしたが、分子の組織化自体を追求する基盤的な研究へと移っていった。1990年代に入ってから、界面分子認識や自立性ナノ薄膜の機能化が主なテーマとなった。その後は、より実用的な可能性を求めて巨大ナノ薄膜の開発を行ってきた。このような研究対象の変遷は、自然な研究の発展であると同時に、それぞれの時代を反映する国内外の潮流にも影響されている。